

歴史を受け継ぐ 祇園橋

未来へつなぐ保存修理

架橋から約200年を迎える中央新町・船之尾町間に架かる「祇園橋」。国の重要文化財に指定されている本渡地域のシンボルの存在ですが、令和元年には橋桁が落下する事故が発生しました。また、令和7年8月の豪雨では、高欄部（欄干）が一部流出するなどの被害を受けています。今号では、祇園橋の歴史や文化的価値、そして、橋を後世に残すために今年度から実施する保存修理について紹介します。

図文化課 ☎32・6784



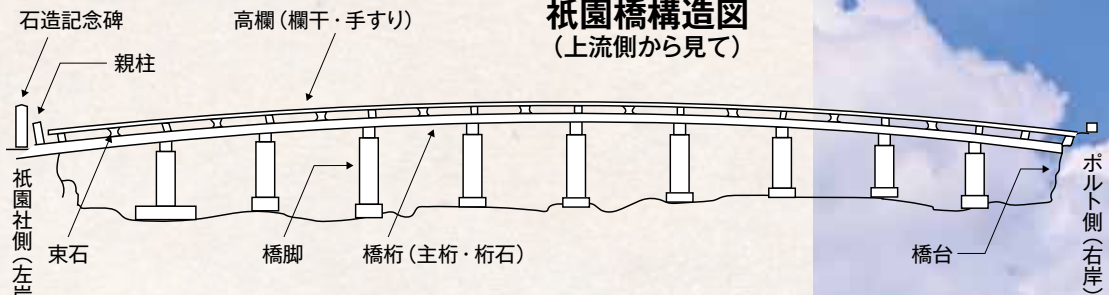
国指定重要文化財
「祇園橋」

祇園橋は、天保3（1832）年、当時の町山口村庄屋・大谷健之助が発起し架橋しました。橋の正式な名称は付けられておらず、祇園社のそばにあることから通称として祇園橋と呼ばれています。大谷は、河岸の護岸工事にも携わっており、橋の架橋と河岸の石垣の造成はあわせて行われ、当時の一大事業となりました。

橋の長さは28・6m、幅員は3・35mで、現存する石造桁橋（横に渡した桁を橋脚が支える構造）では国内最大級を誇ります。全国的にも珍しい「多脚式」で、平成9年に国の重要文化財に指定されました。

これまでの祇園橋の歴史を受け継ぎ、重要文化財として未来へつなぐために、地域の皆さんの協力のもと保存修理を進めていく必要があります。

祇園橋構造図
（上流側から見て）



補強前



補強後



橋脚根本の
コンクリート補強
昭和43年（1968）

現祇園橋建設 天保3年（1832）

現在の位置に仮橋架橋（文政11年の洪水により流出か）
文化7年（1810）

現在の位置に土橋架橋 宝暦2年（1752）

桁石の取り換え 昭和50年（1975）
※その後複数回実施

右岸床版解体工事 昭和57年（1982）

国の重要文化財に指定 平成9年（1997）

桁石が落下する事故が発生
以降通行止めに 令和元年（2019）

石造記念碑の表面剥離
発生応急保護工事
令和5年（2023）

豪雨により高欄部が一部流出
令和7年（2025）



※写真は昭和54年

祇園橋の利活用の歴史

建設当時から現代に至るまで、南北を結ぶ道として利用されてきた祇園橋。近代に入ると、本渡の役場や商店街など、橋の右岸側周辺が町の中心となり、生活道としての役割も担ってきました。

古写真には祭りのようすが多く残っており、祇園祭のほか、本渡諏訪神社の例祭や天草殉教祭の舞台にもなっていました。



橋は活用してこそ守られる

熊本大学名誉教授

とし たか
山尾 敏孝さん



祇園橋が国の重要文化財に
指定されている理由

祇園橋は、長大な円弧型（アーチを描く）石造桁橋で、5本の石柱橋脚で9から10列の橋桁石を支える構造です。江戸時代以前の現存している石造桁橋としては最大級を誇ります。石材は、地元産の砂岩質である下浦石が使用されています。橋の左岸に残る記念碑により、天保3

（1832）年に地元の石屋により建設されたことが判明しています。長崎の眼鏡橋に代表される石造アーチ橋の多い九州では、石造桁橋は特殊なもので、技術的な面でも注目すべきところが多いというのが主な理由です。

九州で石造アーチ橋が多いのはなぜか

理由は主に4つあり、①石橋に用いられる加工しやすい石材が安価で豊富に入手できた②谷が深く、木造の橋では洪水のたびに壊れてしまう厳しい自然環境③中国の石橋を作る技術が長崎経由で伝わり、下浦石工などの技術集団が存在した④橋を架けるための出資者や事業者が出てきたということがあげられます。

祇園橋がアーチ橋ではなく
桁橋なのはなぜか

あくまで推測ですが、町山口川は川幅が広く、川底が浅いため、石を積み上げるアーチ橋は高さが足りず、幅も広すぎるため適さなかったと考えられます。また、元々木造の橋があったため、それを石橋に造り替えるのが自然だったのかもしれませんが。

桁橋のメリットは

木造の橋と同じ構造で石材で造ることができ、構造自体が簡単です。また、桁石が破損したら取り換えることが容易です。一方、同じ長さの石材を用意しておく必要があります。

技術的に注目すべき点

祇園橋は円弧型で、橋の低い所と高い所の差が約1m

ある構造自体が多くないようです。また、橋脚の上に橋桁が直接置いてあるという点は特徴的です。間になぎを入らず直接置いてあることで、橋全体が崩れるのを防ぐ効果もあります。

江戸時代にできた祇園橋が
現在まで残っている理由

建設当時から現在に至るまで維持管理されてきた活用されてきたことが大きな要因と言えます。生活道や祭りの舞台として使用されてきたからこそ、現在まで当時の形を残すことができています。また、橋の周辺に排水口が整備されていることも1つの要因と考えられます。

今回の保存修理で安全性を取り戻し、今後も活用してもらえたらと思います。

祇園橋のここ注目！

水切りの工夫

上流側の最前列の橋脚は、他の橋脚と異なり、角の部分が前面に来るように配置されています。これは、水切りのための工夫で、上流から勢いよく水が流れてきても、その力を受け流すような仕組みになっています。

また、下流側の橋脚は上流側に傾いています。これも、上流からの水圧に耐えるための工夫です。



▲上流側



▼下流側

橋が水没しないために

町山口川の水量は、潮の干満によって大きく左右されます。橋の中央を高くし、反りを持たせることで、増水したとき水没しないように工夫されています。

石橋といえば長崎の眼鏡橋や山都町の通潤橋などのアーチ橋を思い浮かべる人も多いと思いますが、浅く川幅の広い町山口川には祇園橋の構造の方が適しています。また、緩やかな円弧を描く姿も橋の美しさを一層引き立てています。

地元住民が主体となり造り、守ってきた祇園橋

文化課（学芸員）

ひろ ゆき
松本 博幸 係長



祇園橋はなぜあの場所に
架けられたのか

祇園橋は、祇園社の近くにあることから祇園橋と呼ばれて、古くから祇園社への参道としても使われていました。祇園社の中にも、祇園橋に係する石碑があります。これには、祇園橋の建設が始まる以前に周辺の造成工事を行っています。現在の祇園橋が架かる前は、木造の橋が架かって

いて、それを石造に造り替えたものと思われます。

資料などで当時の状況を明確に確認することはできませんが、当時の海岸線は、現在よりも内陸にありました。現在の地形は、江戸時代の干拓や明治以降の埋め立て・造成などで造られています。自動車の利用が活発になる前は、船による海上交通が主流で、外からの往来もあり、祇園橋の周辺は大変にぎわっていたようです。

橋の建設は

公共工事ではなかった

天保3（1832）年に、町山口村の庄屋・大谷健之助が発起人となり、地元の世話人をはじめ、村人の寄附により建設されました。天草の下浦石を使い、地元石工の辰右衛門が架橋を担っています。左岸側の石造記念碑には、発



▶祇園橋附石造記念碑

構造面以外で

文化財に指定された理由

国指定にはさまざまな基準がありますが、祇園橋は「流派的又は地方的特色において顕著なもの」として指定されました。石造アーチ橋が多く残っている九州の中でも、祇園橋のような石造桁橋は比較

【参考：重要文化財
（建造物）の指定基準】

- 一 意匠的に優秀なもの
- 二 技術的に優秀なもの
- 三 歴史的価値の高いもの
- 四 学術的価値の高いもの
- 五 流派的又は地方的特色において顕著なもの



▲干潮時



◀下浦石工と祇園橋について
動画で紹介しています

祇園橋に使われている石は、全て下浦石です。
市では、今回のような修理を含め、万に備えて、貴重な下浦石を切り出して備蓄を続けてきました。切り出した石は、使用できるようにするまで10年程度の養生期間を要します。なお、現在は、下浦石の切り出しはほとんど行われていません。
下浦石は良質な砂岩で、産地である下浦町では石工を多く育みました。石塔の需要が急激に増加した江戸時代、下浦石と下浦の石工たちは九州各地や中国・四国地方にまで活動の場を広げ、現在も天草各地にその作品が残っています。

下浦石ってこんな石

金剛力士像（栖本町） 市指定文化財

通称「仁王さん」と呼ばれている仁王像は、大きく口を開けた「阿形」、口を閉じた「吽形」の二体一対で作られ、伽藍（修行する場所）を守護します。この仁王像は単独のもので、「阿形」の像です。

高さ2m50cmの巨大なもので、天草では数少ない石造仁王像として貴重です。



楠浦の眼鏡橋（楠浦町） 県指定文化財

この眼鏡橋は、楠浦と宮地間を結ぶために方原川に架けられたもので、釜の迫の堀切と共に、楠浦庄屋・宗像堅固の遺徳を後世に伝える二大事業の一つといわれています。アーチ形の石橋は優美かつ丈夫で、明治11（1878）年に架けられました。



下浦石はこんなところにも使われている！

山口の施無畏橋（本渡町本渡） 県指定文化財

染岳登山口にある無畏庵の参道として、明治15（1882）年に架けられました。最初の眼鏡橋が明治4（1871）年にできましたが、その後ぐずれ落ち、明治15（1882）年に再建されたといわれています。

染岳観音に参詣する人たちに、古くから親しまれている橋です。



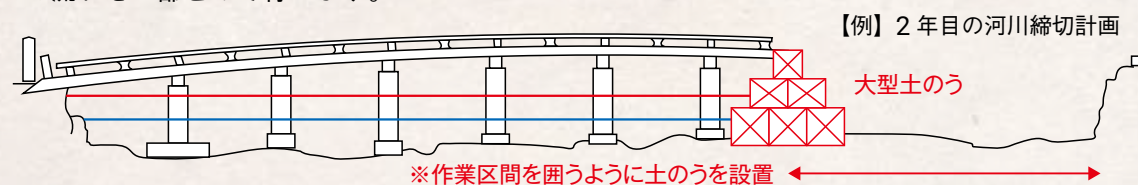
江戸時代に建設され、現代まで人々の生活に欠かせないものとして守られてきた祇園橋。そこには、約200年の歴史が刻まれています。

後世に橋を残していくため、時間をかけて一部ずつ丁寧に修理をしていきます。修理後に再び皆さんに橋を渡ってもらえるよう工事を進めていきますので、ご理解とご協力をお願いします。

祇園橋は、国指定重要文化財であるため、市で行う一般的な修理工事とは異なり、文化庁や熊本県、その他さまざまな機関と連携しながら工事を進める必要があります。工事は雨の少ない時期に行うため、毎年11月から3月（今年度は1月から3月を予定）に5年間かけて行います。

河川の一部締切

祇園橋は、今後人々が安全に通るために、部材の劣化・基盤岩盤の空洞化・耐震の対策が必要です。そのためには、いったん解体することが必須となります。解体工事は、町山口川の流れの一部とめて行います。



- 01 仮締切
大型土のうで工事範囲の川の流れをとめます。11月から3月の非出水期（雨が少ない時期）に設置します。
- 02 クレーン用作業台の設置
祇園橋の左岸側道路は、道路幅が狭く、部材や大型土のうを上げ下げするためのクレーンが侵入できません。そのため、左岸側工事時には、クレーンが作業するスペースとして、河川内に大型土のうや仮橋脚の設置を検討しています。出水期は作業台を撤去します。
- 03 橋脚防護工
祇園橋の橋脚の保護のため、出水期に端部橋脚を保護する床材と基部コンクリートを仮設置します。

石材の補修

祇園橋に使用されている石材は、後世に取り換えられたものもありますが、創建時の材料が多く残っており、部材自体がとても貴重です。そのため、当初の形状と材料をできる限り保存し、劣化速度を遅らせることを念頭に補修を行います。文化財としての価値の維持と橋（歩道）としての性能維持の両立を目指します。



▲石材の欠損や亀裂

町山口川の安全対策

「令和7年8月豪雨で氾濫した町山口川を締め切って工事するのは大丈夫なの？」と思う人も多いかもしれません。締め切る期間は、雨が少ない時期であること、また、工事をするにあたり、増水時の川の水位のシミュレーションを行っています。この検証は、過去10年の11月から3月の最大雨量（1日）から異常値を除いて雨量から水位を計算するものです。

計算では、締切区間でも水位が護岸高を越えない結果となっており、河川を管理する県との協議を経ています。

